

📷 模擬国連ワークショップ 📄

📍 いわき産業創造館（LATOV6F） 📅 1/25(日)



＼各国の大使になりきった中高生らが議論／

国連ユニタールCIFALジャパン国際研修センター主催の「模擬国連ワークショップ」が開催され、市内の中高生22人が参加しました。

国連カフェで提供されるメニューについて、多様な文化や宗教を念頭に議論し、課題解決のための交渉力や思考力、国際的な視野を養う機会となりました。

参加者からは「意見をすり合わせていく難しさを感じたが、他の場面でも生かせるスキルを学ぶことができた」と、意欲的に取り組んでいました。

📷 在京・各界交流の夕べ 📄

📍 第一ホテル東京（東京都港区） 📅 2/12(木)



＼首都圏で活躍する方々へふるさとの情報を発信／

本交流会は、首都圏の各分野で活躍する本市ゆかりの在京の方々や、地元各界の方々が一堂に会し、情報交換や市政全般への理解と協力を頂くことを目的に、昭和61年から開催しています。

第38回となる今年は、300人以上が参加し、本市の中山間地区の活性化策や防災、産業の取り組みの紹介に熱心に耳を傾けていました。また、ハワイアンズダンシングチームによるフラの披露や本市出身のアコーディオン奏者土屋恵さんによる演奏などが会場に華を添え、大いに賑わいました。

写真が語る「いわき」の歴史 暮らしの伝承郷への道のり

いわき地域学會 小宅幸一

いわきニュータウンの具体的な始まりは昭和47（1972）年7月、鹿島街道の東側に広がる丘陵地を対象にした「基本計画」策定でした。このなかには小中学・高校、大学、公園・緑地、集合住宅などの公共施設が位置づけられました。

この計画とは別に、昭和50年代初めに市立博物館建設の構想が立てられ、その領域としては「自然史（地質、生物）」「考古」「歴史」「民俗」「炭鉱」「海洋」の6つに分けられました。昭和54（1979）年に実施した市民アンケートでは「総合博物館」「部門別博物館」を半々に希望していたなか、常磐地区に湯本温泉活性化の観点から「石炭」と「化石」を併設した施設が建設されることが決まり、総合博物館構想は揺らいでいきます。

いわきニュータウンのなかに想定していた総合博物館構想はその後、ふくしま海洋科学館や勿来関文学歴史館、草野心平記念文学館など、分野ごとの施設建設計画が明らかにされていくと、あいまいな位置づけとなっていきます。

転機は昭和61（1986）年に訪れました。江戸時代後

期から明治時代初期に建てられた茅葺き家屋（市指定文化財）が2軒寄贈されたのです。市はこれを復元するための場所として、いわきニュータウン内への位置づけを決めていきます。このことは、言い換えれば、当初のニュータウンにおける総合博物館構想が、民家園（最終的に5軒）建設によって「民俗」に特化した機能へ変容したことを示すものでした。約5.8haの敷地に江戸時代末期の農村を再現した「いわき市暮らしの伝承郷」が開館したのは平成11（1999）年7月でした。



■写真 「いわき市暮らしの伝承郷」の開館

[平成11（1999）年7月 いわき市撮影]